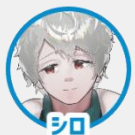


目を覚ます。

汚れた自分の部屋を見渡すと、そこにはシロが立っていた。

シロはまるで何事もなかったかのように、私に微笑みかけた。



「おはよう。よく眠れたかな」

私はかけていた布団を脇に避けると、シロに返事した。



「お陰様でな。それはぐっすりだったよ」

コートは冷蔵庫を開けると、冷えた缶ビールを手を取った。

視界の端で表情が曇るシロを捉えながらプルタブを片手で開ける。

だぶだぶだぶ。

黄金色とも称される液体をシンクに流し捨てながら、コートはシロを顧みた。



「なんだよ」



「あ、いや、なんか思ったよりすぐ行動に移したからさ……」

困惑するシロに、コートは鼻を鳴らした。



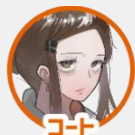
「はん、またシロを無駄に心配させても困るしな」

くしゃり。

コートは缶を潰すと、カーテンを開けて錆びたサッシの窓を開けた。

風が部屋の中へと吹きこんで、よどんだ空気を攫って部屋の外へと連れていく。

空気と共に心が洗われていくような感覚を感じながら、コートは目を瞑った。



「生きる、か」

それは何気なく、口から洩れた呟きであった。

ただ、言葉が産んだ緩やかな決意が自分の中へと漲った。

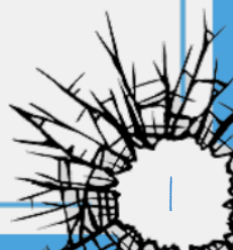
そうして目を開けると、夜空には暗闇が一面に広がっていた。

そうか。今は夜だったのか。

生活習慣の乱れを感じながらサッシに寄りかかり、夜の星へと想いを馳せる。

宇宙にはたくさんの星がある。

夜空に光るきらめきのどれかに、フードはきっといるのだろう。



ただ、あの日にお祭り会場で見えた星とは違って、都会から見る星は全然光っていなかった。
そんな星にコートは口角を少し上げると、安堵した。
私からも星の姿がよく見えないのであれば、星からも私のことはよく見えないだろう。

鼻の頭が痛くなる。

目頭が熱くなる。

頬を涙が流れていく。

私はすすり泣きしながら、上を向き、夜空に向かって中指を立てた。

それはフードへの怒りでもあり、
彼女をいたずらに虐めたこの世界への怒りでもあり、
自分自身への怒りでもあり、
自分だけ先へと進む覚悟でもあった。

くたばれよ。

それだけを言ってフードは網戸を閉じると、部屋の掃除に戻ることにした。



「お前も手伝えよ」



「出来るならやるけどね……」

くだらないやり取りをしながら、作業を進める。
気付けばシロは壁にもたれながら、歌を口ずさんでいた。
何を歌っているんだろうか。
そう思ったコートの心中を察してか、



「キミのために作った歌さ」

そういうとシロは立ち上がり、網戸のほうへと近づいた。



「別に、たいした歌詞があるわけでもないんだけどさ」

キミを想って、大切に書いたんだ。
そういうとシロは恥ずかしがりながらも、歌を口ずさみだした。

シロの歌声が夜に溶けていく。
想いや覚悟を混ぜた一日の終わりに、ゆっくりと溶けていくのであった。

